

平成20年度 森プロ事業実績：飛騨高山・間伐材テクJV

(平成21年3月末現在)

		H19年度	H20年度				5カ年
		実績	計画	実績	達成率	備考	計画
集約化(ha)		—	108	85	79%		348
作業道(m)			3,500	5,843	167%	作業路含む	25,000
間伐等	面積(ha)	—	30	23	77%	利用+切捨	309
	材積(m3)	—	900	1,360	151%		11,100
備考							

H20年度利用間伐等における所有者への還元額(補助金含む)

3000 円/m3

施業集約化の状況

- ・ 曾手地区については、境界確定及び杭打について、ほぼ確定済み。現地調査及び契約が若干残っている。旗鉾地区については、座談会を開催し平成21年8月頃までに所有者同士で境界の杭打作業を完成する予定になっている。



森林所有者による境界杭打ち

施業プランの活用状況

- ・ 提案書を作成して、所有者と事業契約を進めている。

施業プランナーの養成状況

- ・ 現在、現地調査等通じて3名育成中である。

作業道の状況

- ・ 基幹道の幅員は3.6mを基本にしている。現状の高性能林業機械の大きさや、将来に向けた木材生産を考慮した。
- ・ 線形及び配置については、スイングヤードによる集材距離を30m以内を目標に配置した。
- ・ 5,843mを開設したが、フォワーダ道は出来る限り少なく、ほぼトラック(10t)が入れる規格及び路盤を確保した。
- ・ 山作り・森林整備はまず道作りからと考え、ha当たりの路網密度は100m以上を目標にした。
- ・ 現地は黒土で軟弱であり、時期的にも悪く路盤を固めるのに苦労した。



本線および支線



山土砂による安定基盤の確保

作業システムの状況 H20 木材生産性 4m³/人・日

- ・ 作業道開設→伐倒(チェーンソー)→集材(グラップル0.45)→造材(ハーベスタ0.45)→グラップル0.45(積込)
- ・ 作業道開設→伐倒(チェーンソー)→集材(スイングヤーダ0.45)→造材(ハーベスタ0.45)→グラップル0.45(積込)
- ・ 作業道開設→伐倒(チェーンソー)→集材(スイングヤーダ0.45)→造材(ハーベスタ0.45)→搬出(フォワーダ4t)→グラップル0.45(積込)

取り組んだ内容

- ・ 路網密度の目標をha当たり100m以上に設定した結果、グラップルによる直接集材が7割程度となった。
- ・ 山土場仕分・検知については、所有者毎に行う必要があることから、十分な広さの土場を確保することが出来ず、搬出材積全体の4割程度の実績に止まった。



その他

- ・ 『美しい森林づくりin飛騨丹生川』というタイトルで、飛騨農林事務所・高山市・飛騨森林管理署が共同で研修会を開催した。
- ・ 高山市森林づくり委員会・飛騨高山森林組合の主催により、丹生川町民を主な対象とした研修会を森プロ団地で12月7日に開催した。
- ・ 説明の内容は、高密路網開設による高性能林業機械を駆使した低コスト搬出間伐(現地研修会)及びパーワーポイントによる間伐及び補助金等の概要(丹生川文化ホール)。
- ・ その他各地域の林業グループ等による現地研修会を受け入れた。



濁度調査について

- ・ 岐阜県森林研究所に調査を依頼した。採取日は3回で、開設前降雨時と開設後降雨時の比較調査をした結果、降雨時前の濁度数値は1.87であったが、降雨時後は2.67と2.24であった。
※濁度の目安：濁度「0」が完全な透明状態。濁度「20」を継続的に超えた場合、簡易水道の取水施設が停止。
- ・ 観測結果では問題無しとの状況であったが、今後も引き続き調査をしていく予定。

融雪後の森林巡回結果について

- ・ 巡視した結果、間伐後の林分では雪害は確認できなかった。
- ・ 作業道についても同様に、路肩決壊等の被害は確認できなかった。

森プロの成果

森林組合と森林組合員との関係

- ・ 座談会等で路網の必要性及び路網密度の重要性を理解していただき、計画以上に開設できた。
- ・ 各種研修会の開催によって間伐の必要性、また、路網の必要性が組合員に浸透してきた。

森林組合について

- ・ 職員会議等で森プロの概要説明や現地研修会等を開催した。特に搬出間伐を進めていく上での路網密度や路網配置が参考になり、今後の事業地確保に弾みがついた。
- ・ 課長級による森林整備会議を新たに発足し、森林整備に関する組合の経営戦略について毎月1回検討を重ねたことで、職員間の意志疎通が図られた。

森林組合と飛騨農林事務所等との関係

- ・ 管内の地域座談会に県職員が同席し、県の立場から説明・指導をして貰ったほか、高山市林務課も地域座談会に参加することとなり、三者の協力関係が密になってきた。

JV構成員について

- ・ 日和田林産(有)及び(有)山下林業については、予定通り搬出間伐を実施した。事業体についても高密路網による搬出間伐の必要性が理解された。

今後の課題

- ・ 森プロを契機に広大な飛騨地域の森林管理を進めていく上で森プロ第2第3の団地を実行していきたい。
- ・ その為にも今回の森プロ団地で組合員を対象とした研修会をこまめに開催し、地域の森林整備を進めていく。
- ・ 中間土場における仕分・検知・直送体制の構築に取り組んでいるが、今回の森プロ団地の近くには十分な面積の中間土場が確保できないため、今後の検討が必要。
- ・ エヌエフシイ(株)の作業道開設(路盤工に関する施工技術等)について一層の研鑽が必要。